

第1回ミドルリーダー研修 令和2年10月22日(木) 奈良市役所

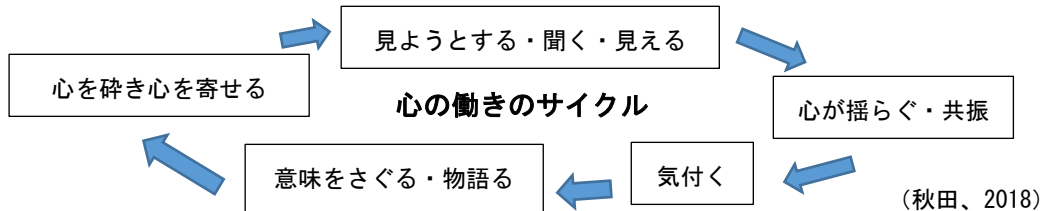
講演「写真から振り返る保育環境」

講師 京都教育大学 准教授 佐川早季子氏



* 研修を保育の質の向上につなげるためには

1. 保育者仲間と共に、保育の営みを「見える化」して話し合う。
2. 記録に基づいて、子どもの視点・経験を専門的な見識と実践的な推理を交わして対話する。
3. 対話を通して、自分達が保育で大事にしていることを確認し、分かち合う。



① 研修の目標

1. 環境構成の「いいね！」ポイントを持ち寄った写真から見つける
2. 環境の4つの視点から、環境構成について考察する
3. これからの課題や目標を見つける

なぜ保育環境を考えるのか

・・・要領・指針の「環境を通しての教育」における環境の意味とは・・・
 「教育の意図をもって環境を構成するとともに、状況に応じて子ども達とともに再構成していく」

園における環境	子どもの経験から考える保育環境の質 (PEMQ より (秋田ら 2018))	
計画的 意図的構成 子どもと環境のかかわり 即興的 柔軟な構成 見過ごしがちなので、 しっかり見直そう！	安心感・居場所感を保障する環境 1. 身体が休まる 2. 一人や仲間内だけでいられる 3. 大事に見守られている感覚 (あたたかさ、自然との共生) 4. 私、私達の場の感覚 (愛着)	夢中になる事を保障する環境 1. 関わりたくなる 2. 利用しやすい 3. 続けたいくなる (夢中) 4. 足跡がある (ふり返り、見通しができる)

② グループワーク 「4つの視点から環境構成について考える」

ワーク

*参加者は持ってきた「子どもが夢中になって遊んでいる時の写真」を用紙に貼る。

1. グループの他の人が撮った保育環境の写真を見て「いいね」ポイントを付箋に書く
2. そのポイントが「4つの視点」のうちどこに当てはまるかを考え付箋を貼る
3. 4つの視点から気づいた事を話し合う
4. 写真の撮影者がその場面を撮った理由を説明する
5. 「もしも」「これから」について話し合う



- 環境を捉える4つの視点
1. 子どもが関わりたくなる環境（誘う環境）
 2. 子どもが使いやすい環境（使う空間）
 3. 子どもの活動過程を支える環境（もっとやりたくなる環境）
 4. 活動の軌跡や足跡が見える環境（振り返る環境）

発表事例 「ダンボール遊び」

『小さなダンボールを使って遊び、感触を楽しんでから・大きな箱・トンネル状にしたもの・切り開いたものなど様々な形のダンボール箱で遊んだ。友達と一緒に入ったり、箱に乗ったり、叩いたり色々な遊びを夢中で楽しんでた。』



- ・・・「ダンボール遊び」からの気づき・・・
- ・1つの遊びの中に様々な願いが込められている（感触遊び～身体遊びへ ・素材・感触・色の工夫）
 - ・子どもが選べる環境（難しすぎず、使いやすく、挑戦したくなる遊び）
 - ・保育者も一緒に楽しむ（人的環境、援助）

保育者が意図した環境とは別に子どもが生み出した想定外の遊びが生まれる

保育者が広げる

意図をもって発達や保育につなげる

「環境構成のサイクル」

③ 4つの視点(具体的に環境を考える) (PEMQより(秋田ら2018))

子どもが関わりたくなる環境(誘う空間)	使いやすい環境(使う空間)
<ul style="list-style-type: none">・さらなる興味関心が引き出されている (新しい可能性を感じさせる)・他の子ども達と群れられる空間・見本が提示されている・子どもの多様な表現が促されている・季節感を感じさせる・文字や数に対する意識が引き出されている	<ul style="list-style-type: none">・子どもの目線で配置されている・整理整頓されている・様々な素材が使用できる(質・量)・視覚的に情報を捉えやすい・子どもが自由に手に取ることができる

子どもの活動過程を支える環境 (もっとやりたくなる環境)	活動の軌跡や足跡が見える 環境(ふり返る環境)
<ul style="list-style-type: none">・遊びや活動に取り組める空間が用意されている・子ども達が経験を共有できる・文字や数を通して日々の生活習慣や遊びへの見直しをもつことができる・片付けしやすい場所になっている・片付けをする/とっておく程度が柔軟である とっておくか、とっておくとしたらどうするか?	<ul style="list-style-type: none">・子どもの足跡が残されている・子どもが自分自身や友達の成長や存在を実感できる・保護者への情報伝達を意図している

④ 学んだことを今後に活かす「往還的研修」

- ・研修で学んだことを現場で実践して、一定期間を経てまた研修の場に持ち帰って研修する
- ・研修で学んだことそのものや研修の活動自体を「現場での課題解決に近づけて行く」
- ・転移が起きるためには「他者からのフィードバック(他者評価)」が必要(中原ら, 2019)



・若手職員にとってミドルリーダーは、近未来の自分の姿として写っている。ミドルリーダー自身が保育を探究するおもしろさを感じながら、保育する姿を見せることが後輩育成につながる。保育環境の重要性を根拠を持って伝えられるよう今回の学びを実践につなげ、次回に持ち寄り皆で共有する。

実践課題・・・「子どもが夢中になり、より主体的に生きることを保証する環境を構成していくための、今後の課題と配慮を考えて実践する」

作成者 幼児教育アドバイザー 老田 紀子